

25 【どくまる】

下校中、乞食（こじき）にであうのは、めずらしいことではありません。

でも、乞食のこどもにであうのはめずらしい。

舌打ちをしている。

つつつつ

つつつつ

つつつつ

乞食の子は油断ができない。

乞食のかっこうをしていて、その実、王子様だって話がある。

それにぼくのかっこうだって、乞食のかっこうとあまり変わらない。

つまり、乞食の子なら、ぼくの仲間というわけ。

そのつもりで、

「ぬしはだれじゃ」

ぼくは、なれなれしくききました。

(もしかすると、かいじいのこどもだったりして)

とのおもいも、少しはあったのです。

「おれは、清丸（きよまる）じゃ」

「いいなまえじゃのう」

「おまえの名前は」

「わしは、きんちゃんじゃ」

「そんな名前あるか。金太郎とか金五郎とかじゃろ」

「すまんのう。わすれたかもしれん」

「おまえは作文とか書かんのか」

「さくぶんはすきじゃ」

「そこに金之助とか金次郎とか書くじゃろ」

「いんや、かいたことねえなあ」

「あほらしい。名前のない子は乞食の子じゃ」

「ぬしにいわれたくはないのう」

ぼくがそういうと、清丸は笑いました。

つつつつ

つつつつつ

つつつつつ

そうか、さっきのは舌打ちではなく、笑い声だったのか。

「金ちゃんは、おれを知っているかい」

清丸は歩きながらききました。

「しっとる。さっきあつたきよまるじゃろ」

ぼくも歩きながら答えました。

「おまえは面白いやつじゃ。面白いやつはいいやつじゃ」

清丸は真面目くさった顔でいいました。

気づくと清丸は裸足（はだし）でした。

砂利道だから、足が痛いはずです。

ぼくは靴を片方あげました。

「これで、いたさもはんぶんずつじゃ」

ぼくは偉そうに胸を張っていいました。

清丸の足は、ぼくよりも少し小さい。

でも清丸はうれしそうでした。

「おまえは親切なやつじゃ。親切なやつは長生きできん」

清丸はそういうと、とたんに駆けだしました。

速いのなんの、とてもつかまらない。

清丸は、小山の方に消えて行きました。

ぼくはそのまま、懐爺のところに行きました。

「せつないのう」

「またおばけに遭遇しましたか」

「いんや、ともだちができたんじゃ」

「それは目出度（めでた）い、目出度いですねえ」

「すぐにともだちをなくしたんじゃ」

「なるほど。それは切ない話です」

「でも、くつをかたほうあげたんじゃ」

「もしかして、舌打ちするふうに笑う子ですか」

「かいじい、きよまるをしっておるんか」

「その子は清丸ではないです」

懐爺は断言しました。

「ないなら、なんじゃ」

「【どくまる】です。【どくまる】というおばけ」

「おばけにはみえんかったのう。やさしかったのう」

「おばけにみえるおばけは、おばけにみえないおばけにくらべれば、可愛いもんです」

「わしはなんもされんぞ」

ぼくは強調しました。

「靴を片方盗まれたでしょう」

「あれはぬすまれたんじゃない、あげたんじゃない」

「でも誉められたんであげたんでしょう。それが【どくまる】のやり口です」

懐爺は断言しました。

「ほめられたせいじゃねえ。はだしであしがいたそうだったからじゃ」

「それも【どくまる】のやり口です」

懐爺は断言しました。

今日の懐爺は断言ばかりする。

懐爺が断言すると、ぼくは言葉を喪（うしな）う。

「金ちゃんに【どくまる】の住処（すみか）をみせてあげたい。そうやってせしめた物品で、溢れかえっていますよ」

「つまらんのう」

ぼくは騙された自分が、つまらなかったのかもしれない。

「いえいえ、乞食の子は実は王子様という話は面白いでしょう」

懐爺はわざと舌打ちするふうに笑いました。

「よかったのう。きよまるはこじきでなく、おうじでよかったのう」

ぼくは知らずに涙を流していました。

ぼくの涙が乾くのを待って、懐爺はいいました。

「【どくまる】は本物の乞食ではないのですが、本物の乞食は仏様のおばけですから、大切にしなければいけません」

「おうじでなく、ほとけかい」

「【こちじき】というおばけです」

ぼくは頭が混乱してきました。

本物の乞食が仏様で、それは【こちじき】というおばけとは。

「ほんもののこじきなら、やっぱしこじきだろのう」

「乞食は偽物が多いですから、本物は少ないのです」

懐爺がそういうならそうなのだろう。

「【こちじき】は、こわいおばけか」

ぼくは気になることをききました。

こわいか、こわくないかでは、大変なちがいですから。

「【こちじき】は昔から、昔からというのは平安時代からですが、ずいぶんいじめられてきました。ですからおばけのなかでも一番怨念（おんねん）が強い。【こちじき】をいじめてしまった者は、どんなに偉くて高い地位の人でも、じつに悲惨な死に方をします」

「どんないじめかたするんか。どんなしにかたするんか」

ぼくは興味津々（きょうみしんしん）で懐爺にすり寄ったものです。

「だいたい乞食に対して乞食と呼んで蔑むのは、病人に対して病人と蔑（さげす）むのと同じくらい卑怯（ひきょう）なことなのです。ただ言葉で虐められるのはまだ序の口です。【こちじき】はよく石を投げられます。よく糞も投げられます。そんなことをした者は、体が石になって糞尿を垂れ流して死ぬのです」

「おそろしいのう」

ぼくは石になった自分を想像していました。

「【こちじき】は仏様のおばけですからね。神様とか仏様は実にこわいものです。神仏の罰が当たるといでしょう。あれは神仏の祟り、つまり復讐です」

「【こちじき】にあいたいのう」

ぼくは懐爺に懇願しました。

懐爺なら、何とかしてくれるにちがいない。

「そういうとおもいましたよ。でも残念ですが、金ちゃんは【こちじき】にはあえません」

「なぜじゃ」

「なぜって、【こちじき】は、いじめた者に現れるのです。金ちゃんは乞食をいじめたりしないからあえないのです」

「ならば、いじめてみようかのう」

もちろん冗談です。

懐爺もわかっていて、苦笑しました。

「あえぬが仏です。それでいいではありませんか」

「あえぬがほとけ、あえぬがほとけ」

ぼくは念仏（ねんぶつ）を、となえる気持ちで繰り返しました。